

十月のテーマ

疾病信号



え・城谷俊也

# 今この瞬間が 0 (ゼロ) である

倫

理研究所が発行する月刊誌『新世』11月号に、山梨県の網野千鶴さんの体験談が紹介されています。

詳細は誌面に譲りますが、夫の悪性リンパ腫発症を機に倫理指導を受け、実践を通じて、夫婦関係の順序を疎かにしていた自分に気づいたという体験です。治療を始めてから2年後には、ステージ4だった夫の悪性リンパ腫が寛解し、その後4年が経過した今も再発は見られないといえます。

さて、数学の世界には「0」という特異な性質を有した数字が存在します。数学的観点に立つてみると、0は何もない「無」の状態を表わしながら、正・負の数の起点となり、0がなければプラスとマイナスも理解しにくくなります。数学的には、プラスもマイナスも必要ですが、無を表わす0(起点)もまた劣らずに重要なものです。

このことを人生に置き換えると、数学と同様に0を自覚した時、自分的方向にも進むことができま

す。まず大切なことは、「今ここが0の地点である」と自覚することでしょう。

前述した網野千鶴さんの体験では、夫が悪性リンパ腫を発症し、倫理指導を受けた時が、まさに0の地点であったといえるでしょう。網野さんは、この起点を倫理指導を通じて自覚するに至ります。そして、夫に寄り添い、本来の夫婦の立ち位置に戻るといふ実践で、夫婦仲の改善というプラスの方向に歩んでいきました。

まさしく起点を自覚し、自分自身で前進した体験です。夫の病を自らの起点と受けとめることができたのは、網野さんの責任感の強さでしょう。

しかし、それ以前にも、いたるところに網野さんの0はあったのかもしれない。夫との出会い、結婚に対する家族からの反対、自身の起業。当初は診察を拒んだ夫を説得し、病気が判明したのも、網野さんの行動がきっかけでした。

倫理研究所の二代目理事長である丸山竹秋は、著書『0の誕生』

新しき倫理の出発点』の中で、人生における0について、次のように述べています。

すなわち金持は、その裏に貧乏があるぞ、油断するなということであり、貧乏人は、金が懐にころがってくるぞ、喜べということである。病人はよろこべ、健康になるぞということであり、健康者はぼやぼやしていると病人になるぞということである。すべてが、そうである。

私たちの生活の、あらゆる時と場で、大小様々な0地点が表われます。というよりも、日々の一瞬が0なのでしよう。

しかし、たとえ今が0であると自覚しても、欲やエゴが顔を出すと、歩むべき方向を見失います。ここで必要なのが「心の0化」です。丸山竹秋はそれを「白紙・空・何もない精神」と表現しました。

病気に対しても、心を0にしてその信号を受け入れ、行動に移した時、現状を好転させるきっかけになるでしょう。「病気をこわがる、恐れる時代は過ぎた」(『万人幸福の葉』第7条)のですから。